

築城400年祭・プレ「彦根あそび博」
ぶらっと彦根・まちナビ 2006
彦根をあそぼう

今回の「ぶらっと彦根」は、2007年3月21日から11月25日まで実施される国宝・彦根城築城400年祭の協賛事業「彦根あそび博」の事前試行（プレ「彦根あそび博」）として、11月23日（祝）に開催し、延べ206名の皆様に参加いただきました。

また、まち歩きには、携帯電話を利用した**学習型まち案内システム「まちナビ」**を活用し、実体験いただいた方にはおおむね好評を得ました。彦根商工会議所を中心に開催されたその模様をお伝えします。



第1部の講演会では、彦根景観フォーラムの山崎理事長から、世界遺産への道筋として「**屋根のない歴史博物館構想**」と「彦根あそび博」の提言がありました。

また、谷口滋賀大教授より「まちナビ」システムの案内、柴田県立大教授から「防災・耐震・まちづくりフォーラム」の紹介がありました。



さらに、母利(もり)京都女子大助教授による「**新史料で語る「井伊直弼」**」では、明治以後今日まで、彦根では政治的タブーとされている直弼の人物像が、実は史料の改ざんによって作られた虚像であることが側用人宇津木氏の史料から発見され、勅許を待たない開国は、実は独断専行ではなく幕閣の総意に忠実であったこと、直弼は消極的開国論者であったことなどが明らかにされました。

第1部には、105名の参加がありアンケート結果では、9割が「良かった」との感想が寄せられました。

第2部の「彦根を遊ぼう（まち歩き）」では、これまで街の駅寺子屋力石で「それぞれの彦根物語」として語られた場所を中心として、4コースに分かれ計82名の方が参加されました。アンケートでは、「本物の保存に感動した」「もっと多くの参加者を期待する」「市民運動としての保存活動が必要」「こんな古民家に住みたい」「子供の参加を」などの意見と、実施時

期以外は大変良かったとの感想が得られました。

① 善利組・組屋敷界隈で遊ぼう



たねや彦根藩湖東焼美濠（みほり）美術館で、織細緻密、絢爛豪華な幻の湖東焼を学芸員の解説で鑑賞したあと、湖東焼の再興をめざす中川一志

郎さんの「一志郎窯」で作品を楽しみました。その後、朝鮮通信使の宿舎「**宗安寺**」から、芹橋の「**善利組足軽屋敷**」へ。太田家、中居家を特別に公開していただき、表千家流のお点前でお茶をいただき感激。市教育委員会の谷口さんの解説で武家文化を堪能しました。そして、伝統製法を守る「**大半**」さんへ。おいしい生湯葉を買いました。



② 高宮脇街道・七曲で遊ぼう

新設された七曲がり仏壇展示場をはじめに、永楽屋さんでの七職の見学では、見事な手仕事に目を奪われました。その後、県立大濱崎先生の丁寧な解説で七曲がりの町家を堪能しました。なかでも吉田家ご主人の彦根城築城からのお話にはびっくり…。朝枝家では、町家の新しい住まい方に感動。佛教関係の展示を準備され、将来は地元を始めとする人々のたまり場になればとのお話。これも街の駅として、成功して欲しいと願いながら村岸邸へ。村岸邸では茶菓をいただきながらのフリートーク。参加者の一番知りたい”町家に住むための本音”も解説の戸所さんよりあり、有意義な一日でした。



③ 芹川・雨壺山で遊ぼう

紅葉が美しい芹川堤のけやき道を、樹医の渡邊さんに古木や巨木の解説をしていただきながら散策。続いて、芹川沿いにある晒庵（さらしあん）では、NPO芹川の有馬さんから、芹川清



掃や彦根りんご復活などの取り組みについて話をうかがいました。

後半は、まず長久寺内の梅の古木や石碑を見学。そのあと雨壺山へ。護林会の大野さんから里山復活のための竹林整備のお話をいただきました。身近な川と里山の歴史・自然について、楽しく学ぶことのできた三時間でした。



④ 城郭・内曲輪で遊ぼう

かつての武家屋敷である花木家跡、長野家跡から切り

通し御門を経て、直弼が青年期を過ごした「埋木舎」へ。ここで直弼の暮らしや茶室での茶会、有名な一期一会の解説を伺いました。さらに、佐和口門を入り、直弼の歌碑や大老像の前で、滋賀大阿部先生より、横浜開港にまつわる直弼についてなどの解説をいただきました。その後、樺御殿（楽々園）を経て、黒門口にて松の木などの植物や石垣の特徴についてボランティアガイドより説明を受けました。身近な場所での新発見の多いコースでした。



連載 創造的修景を考える

—よりよき次代のために— 建築家 戸所 岩雄

とき 第7回 時代をこえて一時間に耐えうる修景

時代をこえて美しさや魅力(価値)を保ち続けるということは2つの面があります。

- (1) 創られたときに保有していた魅力や価値(物質的価値を含め)が、損われずに維持される場合
- (2) 経年による変化が生じることにより、本来の魅力とは変わっていきながらも新たな魅力や(付加した価値も含め)価値が持続し続ける場合

西洋的な美には統一の様式美を尊ぶ傾向にあります。一方、日本的と呼ばれる美には絢爛豪華な、また高度に洗練された美を尊ぶ一面、時を経ることや多様な手法のコラボレーションがもたらす枯淡な美を楽しむ美意識も併せ持ちます。日本的感性のひとつの集約ともいえる・茶の世界・にあっては、その双方ともを大切にす価値観があり、さらには数寄(好み)が



現代的数寄としてのファサード

あり、その中庸ともいえる『きれいさび』、『花数寄(はなすき)』という領域があります。

新旧を併せ持ち、また、きれいとわび・さびが共生しつつ新たな美の世界を創造するという高度な精神文化を持ち、千利休のストイックなまでもの禅的美意識を好む反面、古田織部のように自由に遊び心のある美意識も楽しむと

いうことにも理解をしめす自由闊達さを持つ日本人。

近代化・現代化の過程において(1)を手立てとしてきたことへの驕りがみえ始めた今、(2)の持つ意味を考えるのもいいかと思います。

世界(歴史)遺産は、その創られた時代の特性を代表し顕彰するものであるなら、彦根(特に旧のまちなか)の修景を考える場合、その特性である城下町のまちの構成(町割り)を大切にし、その価値・魅力を残し継続・維持する努力は大切です。

しかし、そのことだけに留まらずその魅力をさらに高めていくことも必要です。そこで創造は時代を超え、魅力あるまちを練り上げつつ創り続けていくという気概にもとづき(2)の価値観を踏まえたものであってほしいと思います。建物だけにとどまらず一石一木にいたるまで、その気概と価値観をもって創られてほしいものです。そのことが実践されてこそ、多くの市民の関心と創造への評価が一致するという夢・理想が見えて来ると思います。



歴史的景観を紡ぐ



象徴として付加する